



CQM(超短期経済予測モデル)

稲田義久 (APIR 研究統括)

内容に関するお問い合わせは下記まで
e-mail: inada-y@apir.or.jp

日本経済(週次)予測(2014年5月19日)

ポイント

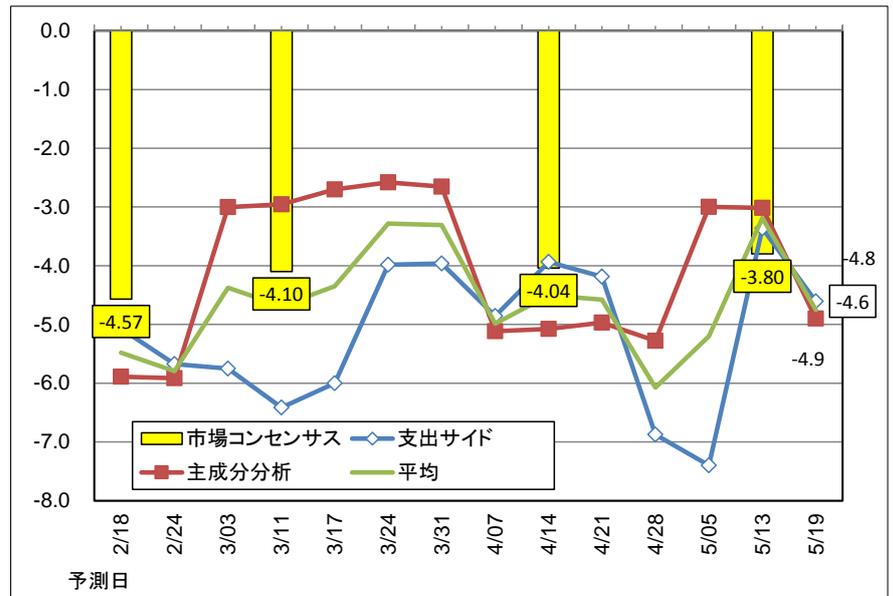
▶15日発表のGDP1次速報値によれば、1-3月期の実質GDP成長率は前期比年率+5.9%と6期連続のプラス成長。駆け込み需要を主因に成長率は前期から大きく加速。結果、2013年度の実質GDP成長率は+2.3%となり、伸びは前年から加速した。4年連続のプラス成長。

▶1-3月期の超短期モデル最終予測は、支出サイドが前期比年率+4.5%、生産サイドが同+6.6%、平均同+5.6%となった。成長率の実績は、ほぼ予測の範囲に収まった。

▶1-3月期GDP1次速報値を更新した、今週(5/19)の支出サイドモデルは、4-6月期の実質GDP成長率を前期比-1.2%、同年率-4.6%と予測。先週の予測から下方修正となった。

▶4-6月期は純輸出(前期比+0.1%)が小幅拡大するが、内需が駆け込み需要の反動で大きく縮小(前期比-1.3%)する。

CQM予測の動態：実質GDP成長率
2014年4-6月期(%, 前期比年率換算)



<4-6月期は-5%近くのマイナス成長を予測>

15日発表のGDP1次速報値によれば、1-3月期の実質GDP成長率は前期比年率+5.9%(前期比+1.5%)と6期連続のプラス成長となった。駆け込み需要を主因に成長率は10-12月期(前期比年率+0.3%)から大きく加速した。また市場コンセンサス(ESPフォーキャスト5月調査:同+4.29%)から上振れた。結果、2013年度の実質GDP成長率は+2.3%となり、前年の+0.7%から伸びは高まった。4年連続のプラス成長。

1-3月期の超短期モデル最終予測は、支出サイドが前期比年率+4.5%、生産サイドが同+6.6%、平均同+5.6%となった。成長率の実績は、ほぼ予測の範囲に収まったといえよう。予測動態を振り返ると、平均予測は2%から5%半ばへと上昇トレンドを示した。対照的なのは支出サイドと生産サイドの予測動態である。両モデルからの予測は月次データが更新されるにつれてスイングしているが、それに大きな影響を与えているのが純輸出(支出サイド)と鉱工業生産指数(生産サイド)である。純輸出は、1月が低調、2月は回復、3月は再び低調となった。一方、鉱工業生産指数は、1月は堅調であったが、2月は大雪の影響を受け低調、3月は駆け込み需要の影響を受け再び上昇した。これらの逆の動きが両モデルからの予測のスイングに色濃く影響していることがわかる。市場コンセンサスは4%半ばでほとんど動いていないが、1-3月期は決して安定的に高成長を実現したのではない。

1-3月期GDP1次速報値を更新した、今週(5/19)の支出サイドモデルは、4-6月期の実質GDP成長率を前期比-1.2%、同年率-4.6%と予測。先週の予測(-3.4%)から下方修正となった。4-6月期は純輸出(前期比+0.1%)が小幅拡大するが、内需が駆け込み需要の反動で大きく縮小(前期比-1.3%)する。

- ・本レポートは執筆者が情報提供を目的として作成したものであり、当研究所の見解を示すものではありません。
- ・当研究所は、本レポートの正確性、完全性を保証するものではありません。また、本レポートの無断転載を禁じます。
- ・お問い合わせ先：一般財団法人アジア太平洋研究所 contact@apir.or.jp 06-6485-7690